

渡忠秋年譜稿（一） 明治以前編

田 中 仁

はじめに

渡忠秋は、近世後期から明治にかけて京都を中心に活躍した桂園派歌人である。香川景樹の門下として『桂園一枝』の続編である『桂園一枝拾遺』の刊行に携わり、景樹が没した後は、熊谷直好や香川景恒らとともに桂園派歌壇を支える一方で、幅広い人脈を築き上げた。

明治以降、歌道御用掛として宮内省に出仕して、八田知紀や高崎正風といった薩摩出身の桂園派歌人たちとともに、明治初期の宮中歌壇の礎を築いたという点でも重要な歌人である。現在、渡忠秋の経歴や和歌については兼清正徳氏『京都の桂園派歌人たち』（山口書店、平成二年刊）所収の「二 桂園派歌人 渡忠秋」が備わるものの、それ以外にまとまったものは見られない。

本稿は、兼清氏の先行研究をふまえつつ、渡忠秋の略年譜を作成し、一生涯の事績を通覧することを目指すものである。なお、本稿では明治以前の事績をまとめることとし、明治以降については稿を改めたい。

〔凡例〕

- 一、この年譜は、近世後期に活躍した桂園派歌人渡忠秋の事績を年次順にたどることを目的とする。各項目の記述は、年月日、事績・内容、出典、参考文献の順とし、出典については（ ）、参考文献は「 」で示した。参考文献は初出のみ、出版社名・所載誌名・刊年を記し、二度目からは省略した。
- 一、通常の項目は○印、特に重要な項目に◎印で記した。
- 一、年は判明しているが月日が不明な項目については□印で記した。
- 一、日付の確定が難しいものについては△印を記した。
- 一、この年譜では、存命中の事績に限らず、没後の関連事項についても記述した。
- 一、なお、極力原資料にあたることを前提として作業を進めたが、やむを得ず原資料にあたるのが困難な場合には、引用文献を明記した。
- 一、暦の算定に関しては『日本暦日便覧』（汲古書院）を参照した。

文化八年（一八一二） 辛未 一歳

◎二月十日、近江国高島郡舟木村の材木商渡政舎まといえの長男として生まれる。本姓は、平氏または鳥居氏で、忠秋・安雄・新太郎などと名乗り、楊園あるいは桂蔭と号した。

渡氏は紀伊国牟婁郡熊野権現社担当快慶の後裔とされ、先祖の一人である渡里新左衛門忠景は、新田義貞に属し

て後醍醐天皇（南朝）方の武将として『太平記』の逸話でもその活躍が知られる人物である。『桂蔭』下「楊園記」

天保元年（一八三〇） 庚寅 二十歳

□このころ和歌を中江千別ちひまに学ぶ。『安曇川町史』

中江千別（一七六七〜一八三八）は近江の国学者で、本居春庭・大平に学んだ国学者である。白禱かし廼の舎やと号した。

天保六年（一八三五） 乙未 二十五歳

□このころ香川景樹に入門。東塙塾に学ぶ。『桂蔭』下

香川景樹（一七六八〜一八四三）は江戸時代後期の京都を中心に活躍した歌人。「しらべ」を重視した優美平易な歌風で知られる。景樹の歌塾・東塙塾に集まった門人はきわめて多く、景樹の号・桂園にちなんで桂園派と総称される。江戸時代後期から明治期の歌壇において桂園派の歌風が風靡した。忠秋は、以後、景樹が没するまでのおよそ八年間師事している。

天保十年（一八三九） 己亥 二十九歳

□このころ家を弟政秀に譲り、京都へ出て三条家に仕える。（『桂蔭』下「楊園記」）

天保十一年（一八四〇） 庚子 三十歳

□山田清安、帰国餞別歌を詠む。（『桂蔭』下）

□このころ桂園社臨時当座録に名が見える。（『桂園秘稿』）〔兼清〕

天保十二年（一八四一） 辛丑 三十一歳

□夏、風俗匡正令下の夏歌を詠む。（『桂蔭』上）

○六月十四日、景樹、従五位下に特叙。在京門人に回状する。（中村肇氏蔵回状）〔兼清〕

□冬、景樹、忠秋父政舎の還暦賀歌を詠む。（『桂園遺稿』下・須川昭一氏蔵詠草）〔兼清〕

天保十三年（一八四二） 壬寅 三十二歳

□四月、藤川百首題点取の歌十四首を詠む。（『桂園秘稿』）〔兼清〕

□このころ「穂井田忠友判六番歌結」に三首あり。（『桂園秘稿』）〔兼清〕

天保十四年（一八四三） 癸卯 三十三歳

◎三月二十七日、景樹、七十六歳で逝去する。

□秋、景樹の墓に詣でて追悼歌を詠む。（『桂蔭』下）

□このころ景樹遺愛の文台を形見に贈られる。（『大道寺忠歌集』）〔兼清〕

弘化元年（一八四四） 甲辰 三十四歳

□このころ、忠秋、桜本坊快存とともに東塙塾の忠信無二と評される。（『熊谷直好資料集第三冊』）

弘化二年（一八四五） 乙巳 三十五歳

○三月二十七日、景樹の三回忌追善歌「寄花懐旧」を詠む。（『桂蔭』下）

○同日、景樹の三回忌追善歌「寄道懐旧」の歌を詠む。（『桂蔭拾葉』四）

弘化三年（一八四六） 丙午 三十六歳

□穗井田忠友家歌会で「月前遠情」の歌を詠む。（『桂蔭』下）

弘化四年（一八四七） 丁未 三十七歳

□このころ祇園社前菊水南に住む。（『皇都書画人名録』）

◎九月十九日、穂井田忠友が五十六歳で逝去する。

嘉永元年（一八四八） 戊申 三十八歳

□春、景樹が吉田家から桂園霊神の神号を授与される。（『桂園一枝拾遺』序）

○七月八日、景樹の『桂園一枝拾遺』序を記す。（同書）

□秋（九月十九日か）、穂井田忠友の一周忌追悼歌「鹿声幽」を詠む。（『桂蔭拾葉』三）

□同じく、穂井田忠友の一周忌追悼歌「秋懐旧」を詠む。（同右）

□この年、桜本坊快存が逝去し、追悼歌一首を詠む。（『桂蔭拾葉』三）

桜本坊快存（生没年未詳）は香川景樹門下で吉野桜本坊の僧侶。忠秋とともに「東塙塾の忠信無二」と賞された。

嘉永二年（一八四九） 己酉 三十九歳

○九月十九日、穂井田忠友三回忌追悼歌「秋懐旧」を詠む。（『桂蔭』下）

○同じく穂井田忠友三回忌追悼歌「秋懐旧」(同題別歌)を詠む。〔『桂蔭拾葉』三〕

□このころ刊行された『桂花余香』に歌一首あり。(同書)

嘉永三年(一八五〇) 庚戌 四十歳

□この年、初老を迎え感慨の歌を詠む。〔『桂蔭』上〕

□父政舎古稀の祝歌を詠む。〔『渡平八郎氏藏政舎詠草』〕〔兼清〕

○三月二十七日、景樹の七回忌が行われる。〔『桂園一枝拾遺』序〕

□春、『桂園一枝拾遺』の編集・刊行に携わる。(同書)

○八月十二日、香川景恒・寛隆・清水載之とともに待十五夜月の歌を詠む。〔『香川景恒遺稿』〕〔兼清〕

嘉永四年(一八五二) 辛亥 四十一歳

□十月、貝塚卜半(卜半斎了珍)二百五十回忌の追悼歌「冬懐旧」を詠む。〔『桂蔭拾葉』三〕

嘉永五年(一八五三) 壬子 四十二歳

○十一月七日、父政舎が七十二歳で逝去する。景恒の追悼歌あり。〔『香川景恒遺稿』〕〔兼清〕

嘉永六年（一八五三） 癸丑 四十三歳

□春、忠秋母が亡父の追悼歌を詠み、これに返歌する。（『桂蔭』下）

□二月、初午（稻荷詣）に忠秋判『三十番歌結』が成立する。（同書跋文）

安政元年（一八五四） 甲寅 四十四歳

○正月十五日、忠秋家会始の歌を景恒が詠む。（『香川景恒遺稿』）〔兼清〕

安政二年（一八五五） 乙卯 四十五歳

□七月、景恒・熊谷直好とともに西本願寺翠紅館八景を詠む。（『桂蔭』下）

□このころ「宮古現存和歌者流梅桜三十六家選」に名が載る。（同書）

○八月九日、吉田利充が逝去し、追悼歌を詠む。（『桂蔭』下・『あしの一葉』）

吉田利充は美濃高須の豪商。香川景樹・熊谷直好ら京都の桂園派歌人との親交があった。子に利恭・利和・利純の三人がおり、いずれも忠秋と親しかった。

安政四年（二八五七） 丁巳 四十七歳

□このころ近江に帰る途中、坂本の白毫院完洞を訪ねる。（『紀貫之朝臣墳墓勘文』）

安政五年（二八五八） 戊午 四十八歳

□春、忠秋・吉田利和・吉田利純の三者の歌集『あしの一葉』が刊行される。（同書）

○三月十八日、同年二月初めに徳大寺公純より贈られた桜の木が開花したことを祝って、殿町の自邸にて竹内享寿らを招き、宴を催す。（竹内享寿『菑園集』下）

○七月二十日、森の清樾亭で景恒・岩切実輔・高畠式部らと歌を詠む。（『香川景恒遺稿』）「兼清」

△この年正月から文久二年正月までの間に、冷泉為恭筆「年中行事図」（サンリツ服部美術館所蔵）十二月図に「神樂人長」歌の賛を付す。

同図には、忠秋のほかには谷森善臣（種松）、香川景恒、倉谷友干、能勢春臣、拝郷蓮茵、大田垣蓮月、上田重女、竹内享寿、水野直躬、河本延之、香川景敏ら十一人各一首の画賛歌が収録される。「宇野千代子氏」冷泉為恭筆『年中行事図』について（大阪大学大学院文学研究科「待兼山論叢」三六号、二〇〇二）

安政六年(一八五九) 己未 四十九歳

- 正月、景恒・尾崎宍夫と神楽岡へ小松曳きに行く。(尾崎宍夫『五百津磐村』)
- このころ毎月十五日に忠秋家月次歌会が催される。(『香川景恒遺稿』) [兼清]
- 三月二十九日、景樹の十七回忌に熊谷直好の来宿を懇請する。(『熊谷直好資料集第三冊』)
- 八月十五日夜、門人・荒川重郷とともに広沢の池で観月する。「渡忠秋自筆歌文集」内、荒川重郷筆「いけのうきくさ」『弘文荘待賈古書目』四九号]
- 秋、熊谷直好の『梁塵後抄』が成立し、これを高く評価する。(『先入抄』)

万延元年(一八六〇) 庚申 五十歳

- 春、五十歳となり、その感慨の歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- ◎四月四日、母が逝去する。 [兼清]
- このころ、コレラが流行し、祇園社にて祈願の練物を見物し、歌を詠む。(『桂蔭』下)
- 同じくコレラの流行について歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 九月九日、忠秋判『詠史歌結』が成立する。(同書跋文)
- 九月二十三日、景恒・佐保蒼生雄・尾崎宍夫と音羽滝の紅葉見に行く。(『香川景恒遺稿』) [兼清]
- 十一月、佐佐木弘綱編『類題千船集』初編上巻に六首、下巻に一首が収録される。(同書)

文久元年（一八六一） 辛酉 五十一歳

○三月十日、景恒らと音羽滝の花見を約束していたが参加できず。（『香川景恒遺稿』）〔兼清〕
□この年、忠秋・吉田利和・吉田利純の三者の歌集『あしの一葉』二編が刊行される。（同書）

文久二年（一八六二） 壬戌 五十二歳

□正月末、門人の歌合（若菜題十三番歌合）に、判詞を付す。「渡忠秋自筆歌文集」『弘文荘待賈古書目』四九号』
□二月、門人四人の歌合四種（瞿麦十番歌合ほか）に、判詞を付す。「渡忠秋自筆歌文集」『弘文荘待賈古書目』四九号』

○二月二十四日、千種有文の当座会に出席し、通題待花の歌を詠む。（『香川景恒遺稿』）〔兼清〕

□九月、三条実美の江戸下向に同行する。（『桂蔭』下）

□このころ隅田川のほとりで歌を詠む。（『桂蔭』下）

文久三年（一八六三） 癸亥 五十三歳

○三月十日、孝明天皇の賀茂社行幸の歌を詠む。（『桂蔭』下）

□春、景恒・三輪貞信尼・山口利雄・宮原景賢らと下賀茂で歌文会を催す。（『香川景恒遺稿』）

□秋、二十二番歌合（月前雁、名所女郎花各題十一番）に、判詞を付す。「渡忠秋自筆歌文集」『弘文荘待賈古書目』四九号」

元治元年（一八六四） 甲子 五十四歳

○（文久四年）二月十五日、十一番歌合（柳門黄鳥路題十一番）に、判詞を付す。「渡忠秋自筆歌文集」『弘文荘待賈古書目』四九号」

○三月三日、松浦道輔の「楊園記」が成る。（『桂蔭』下）

○三月九日、宮中舞樂五曲の歌を詠む。（『桂蔭』下）

○七月十九日、蛤御門の変で家屋が焼失する。（『桂蔭』下）

○七月二十一日、自宅焼跡で悲歎の歌を詠む。（『桂蔭』下）

□秋、動乱を避けて一時近江へ移る。この時、忠純と山寺に遊ぶ。（『桂蔭拾葉』四）

○十一月六日、京都を離れ京田辺の草内村に転居、父の十三回忌を行う。（『桂蔭』下）

□このころ草内村の家で「冬夜月」の歌を詠む。（『桂蔭拾葉』三）

○十一月二十九日、岩坊祐文の十三回忌に追悼歌を詠む。（『桂蔭』下）

慶應元年（一八六五） 乙丑 五十五歳

◎三月二十三日、竹内享寿が五十四歳で逝去し、追悼歌を詠む。（『桂蔭』下）

□五月、同じく中陰の追悼歌を詠む。（『桂蔭』下）

○八月二十一日、大坂から上京し、歌友らが二条の水楼で歌会を催す。（『香川景恒遺稿』）〔兼清〕

◎十一月十六日、香川景恒が逝去する。

慶應二年（一八六六） 丙寅 五十六歳

○二月二十五日、高崎正風（左太郎三十一歳）と面会約束するも果たせず。（『高崎正風先生伝記』）

○四月七日、鈴鹿連胤の従三位叙位に祝歌を詠む。（『桂蔭』下）

□七月、暴風の歌を詠む（『桂蔭』上）。また、忠秋家会で初秋虫の歌を詠む。（『桂蔭』上）

○九月二十七日、忠秋の勸進で景樹の追悼歌会が営まれる。（『高崎正風先生伝記』）

□この年、熊谷直好の墓に詣でて追悼歌を詠む。（『桂蔭』下）

□この年、高崎正風の父高崎五郎右衛門十七回忌に追悼歌「寄雪懐旧」を詠む。（『桂蔭拾葉』三）

慶應三年（一八六七） 丁卯 五十七歳

- 春、諒闇に際して感慨の歌一首、山陵を拝して歌二首、また、「鶯告春」の歌二首を詠む。（『桂蔭拾葉』四）
- 正月九日、明治天皇が踐祚し、祝歌を詠む。（『桂蔭拾葉』四）
- 三月七日、高崎正風らと嵐山の花見をする。歌三首と早蕨の絵を描く。（『高崎正風先生伝記』）
- このころ、嵐山大井川で薩摩帰国の高崎正風留別の舟遊びをし、歌を詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- 春、香川景樹の二十五回忌に追悼歌「寄霞懷旧」を詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- 同じく、香川景樹の二十五回忌に追悼歌「春山月」を詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- 三月、竹内享寿の三回忌に追悼歌「水辺落花」を詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- 五月、五月雨欲晴の歌を詠む。（『桂蔭』上）
- 夏、河本延之（慶應元年六月十九日没）の三回忌に追悼歌「蛩」二首を詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- 八月二十七日、明治天皇が即位する。祝歌三首を詠む。（『桂蔭拾葉』四）
- 八月、家集『桂蔭』二冊が成る。（同書）
- 秋、明治天皇の即位の祝歌「寄菊祝」一首を詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- このころ岩上三条南に住む。（『平安人物志』）
- 十二月三十日、宮地維宣撰『歎涕和歌集』の序文を記す。（同書）
- 冬、京都市中に神符仏像が降る騒動が起き、それを歌に詠む。（『桂蔭拾葉』三）
- 冬、平田元衡（閑院宮家諸太夫、文久元年十一月十四日没）の七回忌に追悼歌「寄雪懷旧」の歌を詠む。（『桂蔭拾

葉』三)

△この年、八田知紀が忠秋新居落成の祝歌を詠む。(『しのぶぐさ』前編)

△この年、香川景恒の三回忌に追悼歌「懐旧」を詠む。また、私亭でも追善会を営み、「冬夢」の歌を詠む。(『桂蔭

拾葉』四)

△この年、香川景恒の三回忌に追悼歌「寄花懐旧」を詠む。(『桂蔭拾葉』三)

△この年、松浦道輔(医者・国学者、慶應二年没。『桂蔭下』『楊園記』作者)の三回忌に追悼歌「折菊」二首を詠む。

『桂蔭拾葉』三)

(つづく)

(日本語日本文学科 助教)